

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350294

研究課題名(和文)交渉学を利用した学生 - 社会人ギャップをうめるコミュニケーション力の育成モデル構築

研究課題名(英文)Reports on Cultivating Communities for Students to Contribute in the Society

## 研究代表者

田上 正範 (tagami, masanori)

追手門学院大学・基盤教育機構・准教授

研究者番号：70636951

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：学生が大学卒業後も社会で活躍するために、学生と社会人とのコミュニケーション・ギャップを乗り越える、より実践的な育成モデルが必要である。本研究は、ギャップを乗り越える方法論として、「交渉学」に着目し、学生の現実的側面の向上を図るための動画教材の開発と、学生及び社会人のコミュニティ形成に取り組み、両者が学び合う実践モデルを研究した。これらの研究プロセスから得た知見を報告するものである。

研究成果の概要(英文)：This paper aims at the dissemination of a new course design called "Advanced communication to build trust through Negotiation Practicum." The goal of the research is to report and share our experience in the course of development of the curriculum to foster students' fundamental communication skills so that they can perform well to contribute in the society upon graduation. In the process of developing such a curriculum for the future design, educational ICT has been employed to enhance students' active learning attitudes to work in a team to build and maintain trust among them (as well as among various stakeholders in the society) in a long term.

研究分野：教育工学

キーワード：交渉学 教材開発 コミュニティ

### 1. 研究開始当初の背景

近年、社会的問題として、学生のコミュニケーション能力の不足が取り上げられている。日本経済団体連合会の「新卒採用に関するアンケート調査」によると、採用選考時に重視する要素の第1位は、9年連続で「コミュニケーション能力」である。また、厚生労働省の「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」によると、大卒者の入社3年目までの離職率は30%前後のまま、20年以上にわたり推移している。大学を卒業した社会人と学生とのコミュニケーション・ギャップを乗り越える取り組みは、慢性化しつつある社会問題を払拭する可能性を持つと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、学生と社会人とのコミュニケーション・ギャップを乗り越える、より実践的な育成モデルを構築することを目的とする。利害関係者間で生じた対立・衝突を乗り越える方法論である「交渉学」研究に着目し、交渉学がもつ利害関係者間の対立を、学生と社会人ギャップとして置き換え、両者が学び合うモデルを研究開発するものである。

「交渉学」とは、米国ハーバード大学の交渉学研究所の研究(1979年～)に基づく、交渉の成功確率を上げるための方法論であり、日本人の特性に応じた「交渉学」の教育のあり方について研究(2003年～)されてきたものである。利害が対立した場合、いたずらに対決に向かうのではなく、合意のため解決策を相互に探究するコミュニケーション・プロセスを体系化したものである。

### 3. 研究の方法

学生と社会人とのコミュニケーション・ギャップを乗り越えるために、大きく2つの取り組みを図った。具体的には、学生の現実的側面の向上(研究Ⅰ)と、学生と社会人とが互学互習を行う環境づくり(研究Ⅱ)である。

研究Ⅰでは、学生に、社会の現実的な側面の理解を図る前に、まず現実面を共感することに注力し、加えて、教室で実現可能な方法として、マルチメディアによる情報提供に着眼し、テレビドラマや映画等のDVDを利用した教材開発を行う。また、本研究は、これまでの研究成果より、1コマ90分の大学講義システムの時間制約の中での授業実践や、15コマのコースの基となるカリキュラム開発の企画立案等の研究蓄積を応用するものである。

研究Ⅱでは、学生と社会人とのコミュニケーション・ギャップを乗り越える実践の場として、学生と社会人とが互学互習を行うコミュニティ形成を図る。コミュニティ形成の理論背景として、コミュニティ・オブ・プラクティス(ウェンガーら)を活用し、学生および社会人のコミュニティ形成とコアメンバーの育成を行う。プラクティスとは、「頭

で考えた『仕事のやり方』(理論)ではなく、やってみて学んだ『体験知』(実践)を共有すること」である。また、これまでの研究成果より、社会人と学生の違いや、学び続ける姿勢を育むコミュニティの可能性を示唆してきた。なお、コミュニティに集まる関心事の柱が、社会人から実務教育として評価の高い「交渉学」であることが特徴的であり、両者の学び合いを通して、学生と社会人とのギャップを乗り越えるモデル構築を図るものである。

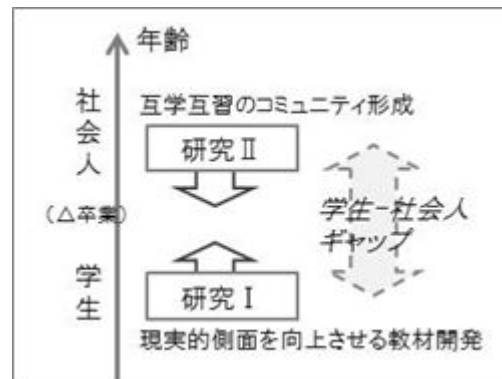


図1 研究Ⅰと研究Ⅱのイメージ図

### 4. 研究成果

(1) 研究Ⅰでは、マルチメディアを活用した教材開発を行った。具体的には、市販DVDを活用し、90分の授業にて利用可能となる教材を開発することである。3年間で、全29作品を検証し、8作品の教材化に成功した。

また、本取り組みを通じて蓄積された知見として、DVD選定上のポイントや教材化する上での留意点をまとめ、紀要等で報告した。

研究当初は、映像(動画)の抽出(1分から5分)に注力していたが、画面キャプチャ等の静止画を用いることで、必要な情報を提供可能であることがわかった。

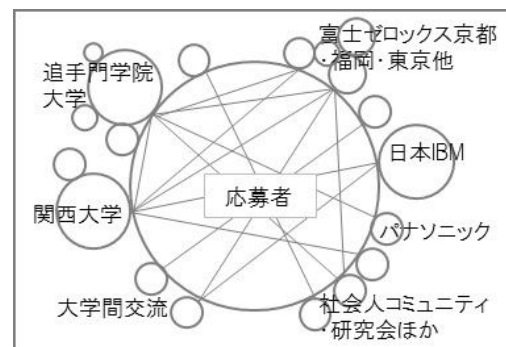


図2 本取り組み実践コミュニティの状況～グローバル・コミュニティのフラクタル構造をもつ

(2) 研究Ⅱでは、学生と社会人とが互いに学び合う、互学互習のコミュニティ形成に成功した。成功を裏付ける理論背景の1つとして、ウェンガー(2002)らが提唱した、持続的かつ相互交流を深める集団となる実践コミュニティのモデルがある。そのモデルの特

徴の1つとして、グローバルコミュニティのフラクタル構造があり、本取組みの中で実現していることを確認している。学びのコミュニティの実績として、平成26年度は計13回(のべ181名)、平成27年度は計23回(のべ326名)、平成28年度は計32回(のべ496名)実施した。開催を継続したことにより、コミュニティの安定かつ発展させることができ、運用ノウハウを蓄積できたといえる。蓄積した知見として、コミュニティ形成上のポイントをまとめ、紀要で報告した。

研究当初は、コミュニティ形成上の核となるコアメンバーの発掘、育成を課題視していたが、学生講師という観点に注目することで、コアメンバーの育成、及び、コミュニティの形成・発展が円滑に進んだ。学生講師とは、学びを目的とし、企画から運営までの全てを主体的に取り組み、教員と同じく、教壇に立ち、学びを育む活動を行う者である。また、学生と社会人とのギャップを追及する中で、当初は、それぞれの立場の違いを注視していたが、それ以上に、経験を未来に活かす能力があるかどうかの方が、所属組織へ寄与していることがわかった。

#### <引用文献>

一色正彦, 田上正範, 佐藤裕一「理系のための交渉学入門」東京大学出版会、2013、まえがき  
E・カレガ、R・マク、モット、W・スライ「コミュニティ・オブ・プラクティス」Harvard Business School Press、翔泳社、2002、91-110、175-208

#### 5. 主な発表論文等

##### [雑誌論文](計 4件)

田上正範, 山本敏幸「学生-社会人ギャップを乗り越える育成モデルの研究開発」追手門学院大学基盤教育論集第4号, pp.7-15, 2017

田上正範「学生-社会人ギャップを乗り越える育成モデルの研究開発」追手門学院大学基盤教育論集第3号, pp.19-30, 2016

田上正範「学生講師によるワークショップの試み - 真の主体性を求めて - 」追手門学院大学一貫連携教育研究所紀要第2号, pp.93-99, 2016

田上正範, 一色正彦「交渉学教育の定性的評価を関連づける定量指標の一考察」, 関西大学高等教育研究(6), pp.101-103, 2015

##### [学会発表](計 7件)

Tosh YAMAMOTO, Maki OKUNUKI, Masaki WATANABE, 'A Proposal: ePortfolio for enhancing active learning for the future generation', International Symposium on Grids and Clouds (ISGC) 2017, Taiwan 5-10 March 2017, Academia

Sinica, Taipei

田上正範, 山本敏幸「DVDを活用した教育実践 ~ 学生-社会人ギャップを乗り越える育成モデルの構築」平成28年度教育改革ICT戦略大会, 私立大学情報教育協会, 2016/9/8, 私学会館(東京都・千代田区)

田上正範, 山本敏幸「交渉学を利用した学生-社会人ギャップをうめるコミュニケーション力の育成モデル構築」平成27年度ICT利用による教育改善研究発表会, 私立大学情報教育協会, 2015/8/7, 東京理科大学森戸記念館(東京都・新宿区) 一色正彦, 三浦真琴, 山本敏幸, 田上正範, 松木俊明「交渉学のFuture Design - 交渉学を身体化する-」, 第13回関西大学FDフォーラム, 2015/6/27, 関西大学(大阪府・吹田市)

Tosh YAMAMOTO, Active Learning for Trust and Consensus Building in Communication, Exploring Leadership & Learning Theories in Asia 2014(ELLTA), 17-19 November 2014, Universiti Sains Malaysia, Penang(Malaysia)

田上正範「ジェネリックスキルを培う新しいアクティブ・ラーニング」, 第11回関西大学FDフォーラム, 2014/9/6, 関西大学(大阪府・吹田市)

田上正範「交渉学を利用した学生-社会人ギャップをうめるコミュニケーション力の育成モデル構築」平成26年度教育改革ICT戦略大会, 私立大学情報教育協会, 2014/9/5, 私学会館(東京都・千代田区)

##### [図書](計 0件)

##### [産業財産権]

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田上 正範 (TAGAMI, Masanori)  
追手門学院大学・基盤教育機構・准教授  
研究者番号: 70636951

##### (2) 研究分担者

山本 敏幸 (YAMAMOTO, Toshiyuki)  
関西大学・教育推進部・教授  
研究者番号: 50367439

##### (3) 連携研究者

奥貫 麻紀 (OKUNUKI, Maki)  
関西学院大学・ハンズオン・ラーニングセンター・准教授  
研究者番号: 50619541

(4)研究協力者  
該当なし